

生贄の森 一章-1

リーリアの父は、厳格を絵に描いたような男だった。

朝目覚めてから夜床に付くまでずっと、公園を散歩していても、甘い菓子を食べていても、彼は眉間に深く刻んだ皺を絶やさない。

冬の寒さが町長の眉間の皺を深くするのだと人々は冗談混じりに嘯き合い、狼の群れでさえ彼に睨まれれば逃げ帰るのだと、半ば本気で頷きあつた。

彼は町の人々に愛されていた。

他人に厳しい以上に自分に厳しく、いつだって誰かのために仕事をこなす町長を、顔が怖いからと言って嫌う者などこの町にはいはしない。

だからこそ、慈愛の女神もかくやの優しさを持つ、町一番の美女が彼の元に嫁いだ時も、人々は町を上げて祝福した。婚礼の儀式の最中でさえ、町長の眉間の皺は相変わらず深かったが、キスをしるとはやし立てられて真っ赤になっていた姿は今でも語り草である。

二人の子供はどんな子だろう。男ならば美男だろうし、女の子ならば絶世の美女になる。そう予言されて生まれてきたのが、二卵性の双子だった。母に似て穏やかな兄と、父に似て厳しい妹。どちらの子供も絵画か人形のように美しく、二人は町の人々の自慢だった。

「誰もリーリアの心を射止める事などできはしない。あの兄と父を見ても、あれに敵う男がこの町のどこにいる！」

酒場では男達がそう嘆き、事実リーリアには親しい男友達すらいなかった。

もちろん、リーリアだって色恋に興味がなかったわけではない。優しい青年に思いを寄せた事もあつたし、逞しい男性に心ときめいたことだってある。だがリーリアを『雪の結晶』と呼んで誰もが距離を置こうとするこの町では、まともに恋などできようはずがなかった。

ヴォルカグラスは狼の森に囲まれた小さな町だ。近隣に点在する小さな村々の束ね役であり、交易の窓口でもある。

主な産業は農業と狩猟だがそのどちらもぱっとせず、裕福な町とは言いがたい。

もとはと言えば、森を切り開いて隣国へ続く街道を作る計画の足がかりとして作られた町だったが、その計画もはるかに昔に立ち消え、名残のように形ばかり立派な教会が建っているのが唯一の特色と言えば特色だった。

その教会に、ボリスという名の老牧師がたった一人で住んでいる。

七十歳を目前にして実にかくしゃくとしたこの老人は、毎日神に祈りをささげ、教会の裏の畑を耕し、それが終ると子供達を集め、時には勉強を教えたり、また歴史や寓話を話して聞かせてやっていた。

長く連れ添った妻に先立たれ、子供に恵まれなかったボリスにとっては、町の子供達全てが自分の子供なのだろう。その子供達の中にはもちろんリーリアも含まれており、リーリアもまた、ボリスを祖父のように慕っていた。

「それでは、今日は何の話をしましようかね」

教会の礼拝堂の隅っこで、ボリスの話はいつもこうして切り出される。そして数秒か、長くても十秒程度悩んだだけで、彼は無限に話をつむぐ事ができた。

赤く燃える暖房の前で、ボリスはゆったりと椅子に腰掛け指を組み、子供達はそれを囲んでわくわくと話を待つ。教会に集う子供たちに比べればリーリアはもう大人だったし、時にはボリスに代わって話し手に回ることもあつたが、大体はそんな子供達に混じってボリスを囲み、さあ話を聞かせてくれとせがむ側だった。

そして今日もリーリアは、子供達に混ざって甘い焼き菓子を頬張りながら、ボリスが話し出すのを今か今かと待ちわびていた。

「今よりおよそ七十年前　　そう、私もまだ生まれていなかった頃の話です」

細く尖った顎を撫でながら、ボリスは老人らしからぬ豊かな声で静かに話す。

「ここは狼の暮らす閉ざされた森でした。人は誰もこの森に足を踏み入れようとはせず、冬には雪が降り積もり、春には色とりどりの花を咲かせるこの森は、どれほど厳重な警備に守られた都市よりも平穏で穏やかだった。しかしその森を切り開き、動物達を追い立て、人間はこの町を作りました。そして狼の獲物を奪い、飢えに苦しむ狼さえも毛皮を求めて狩り立てた。無論狼は怒り狂い、ついには人間を襲って食うようになりました」

子供達は互いに手を握り合い、怯えた目をしてボリスを見る。町は背の高い柵に守られているとはいえ、門をくぐればそこはすぐに深い森だ。木登りのできる子供なら柵を乗り越えることなどたやすい。子供達はみな、狼の恐ろしさをよ

く言い聞かせられている。

「人間と狼は永きに渡り対立していました。結果この町は孤立し、領主からも教会からも見捨てられ、誰もが狼を憎んでいた。しかしその対立を終らせ、共存を生み出した偉大な人物がこの町には住んでいます。それが誰だかわかりますか？」

「町長だ！」

ボリスの質問にいち早く、一人の子供が鋭く答える。それに続いて、他の子供たちの口からも次々と答えが飛び出した。

「イグナートさんでしょ？ すっごい怖い顔してる」

「狼と話ができるんだ！」

「町のことは何でも知ってるのよ？ 悪いことしたらすぐバレちゃうの！」

次々と飛び出す子供たちの言葉に、ボリスは一つ一つ愛情を込めて頷いた。

「そう、そうです。みんなよく知っていますね。彼こそがこの町の長。この町の英雄。この町そのものが彼の成しえた偉業です」

まるで自分の息子を誇るような口調だった。深く目を閉じてゆったりと椅子に腰掛け、ボリスは瞼の裏に過去を見る。「二十年前。そう、あなた達の誰もが生まれる前の話です。この町はもっと貧しく、そして多くの人々が飢えていました。狼の森に囲まれたこの町では、首都へと向かう街道にさえ狼が現れる。当然行商人も狼を恐れて寄り付かず、町には疲労と絶望が満ちていました。それを救ったのがイグナート。このヴォルカグラスの現町長です。彼は狼に歩み寄り、彼らに獲物を捧げることで、狼の脅威から人々を守る事に成功したのです」

「知ってる！ 馬車を出す前の晩に、森に獲物を投げ込むんだろ？」

町長がどうやって森の狼達にルールを覚えさせたのかは誰も知らない。だが街道を馬車が通る前の晩、鳥やウサギを狼に捧げれば、狼は決して人間の馬車を襲わなかった。

「狼は恐ろしい生き物ですが、とても賢く、愛情深い。むやみに森から追い立てようとするれば狼の怒りに触れ、我々は毎夜彼らの遠吠えに怯えなければなりません。町長は決して狼を軽んじず、尊い同居人として扱っている。あなた達も狼を恐れるだけでなく彼らを愛し、そして尊敬する心を忘れてはいけませんよ」

「でも、狼を全部殺しちゃえば、そんな面倒くさいことしなくてすむよ」

少年が言い終わるが早いか、鋭い音が礼拝堂に響いた。ボリス牧師が手にした本で、少年の頭を引っぱたいたのである。

「いってーよこの暴力牧師！」

「暴力とせっかんは別です！ 例え冗談だろうと、そのような事を口にしてはいけません。これは狼の痛みと知りなさい、いいですね？」

少年はきいきいと甲高い声を上げて文句を言うが、牧師はどこふく風である。その光景があまりにも微笑ましくて、リーリアは思わず小さく吹き出した。

「町長って、お姉ちゃんのお父さんなんでしょ？」

あざやかな赤毛の少女が、思い出したように言ってリーリアを見る。

「ぼく知ってるよ。町長は狼より強いんだって！」

「じゃあお姉ちゃんも、狼が怖くないの？」

「うそお！ だって一人で森に入ったら食べられちゃうんだよ？ 怖いよ狼！」

「おれ怖くないよ！ 銃を持って入ればいいんだもん！」

わっと子供達が騒ぎだし、リーリアはあれよあれよと言う間に子供達に取り囲まれてしまった。怖い、いいや怖くないと言い合う子供達の真ん中で、リーリアは慌てて声を高くした。

「落ち着いてみんな！ お父様だって私だって、当然狼は怖いわよ。ボリス様がおっしゃってるのはそういうことじゃなくて、ただ狼を怖がるだけじゃダメってこと」

「どうして怖がるだけじゃダメなの？」

「あら。だって怖いだけの生き物だったら、そいつをやっつけてやれ！ って思うでしょ？」

「だって、怖いのは悪いからなんだ！ 悪い奴はやっつけていいんだよ！」

子供達は口々に、そうだそうだと声を上げる。リーリアはちょっと笑って、わざと大げさに溜息を吐いてみせた。「怖い奴はみんな悪い奴だって言うの？ そんなことはないわ。だってみんな、お父さんやお母さんが怖いでしょ？ 怖いけど、いなくなっちゃえばいいとは思わないわよね？ 美味しいご飯を作ってくれるお母さんに、肩車をしてくれるお父さん。いなくなったらさみしいもの」

「お姉ちゃんもさみしいの？」

ふいに子供達の中から心配そうな声が上がり、リーリアは目を瞬いた。

それからようやく、自分の母の死に思い当たる。もう七年も前の話だ。元々病弱だったリーリアの母は、七年前の冬に肺炎で死んだ。町の誰もが嘆き悲しみ、当時生まれていなかった子供でさえその悲劇を知っている。

「そうね……」

呟いて、リーリアは少し考え込んだ。心を根こそぎ持っていかれたような虚無感と喪失感は、もう随分と癒されたように思う。

それでも、やはり、

「さみしいわ……凄くさみしくて、お姉ちゃん、時々泣いちゃうくらいなもの」

隣に座っていた少女が、心配そうにリーリアの手を握る。だけどね、とリーリアは少女を膝に抱き上げた。

「私にはお父様も、ボリス様も、それにあなた達みんながいるわ。だから悲しくても、いっぱい笑っていられるの。ねえ、私やボリス様も時々あなた達を怒るけど、それでみんなはお姉ちゃんのこと嫌いになる？ やっつけてやるって思う？」

「思わないよ！ だってお姉ちゃんが怒るの、おれ達が悪い事した時だけだもん」

「そうでしょ？ 狼だってそれと一緒になの。狼の森に入って、彼らのお家を荒らしたりしなければ、狼は人間を襲ったりしないわ。狼は怖いけど、だからって全部やっつけようなんて思うのは、凄く悪い考え方よ。狼のことを考えて、尊敬して、そして愛してあげなきゃいけないの。でもそれは凄く勇気がいることだから、みんなにはできるかしら？」

「あたしできるよ！」

「ぼくだって！」

子供達が一斉に立ち上がり、リーリアに折り重なるように突進してくる。その、柔らかな重みに押しつぶされて笑いながら悲鳴を上げ、リーリアはスタンドグラスから差し込む光に目を細めた。

「こらこら、そんなにいっぺんに乗っかっては、リーリアが潰れてしまいますよ」

ボリスが慌ててリーリアの上から子供達をどかしてくれる。

その穏やかな時間を吹き飛ばすように、突然扉を開け放つ音が教会に響き渡った。全員が飛び上がり、音の方へ振り返る。

重たい大扉の横にある、小さな木戸の向こう側に、青ざめた男が立っていた。

「人狼が出た」

開口一番、男は低い声でそう言った。

突然の言葉に目を瞬き、ボリスはリーリアと顔を見合わせる。

「……今、なんと？」

「人狼が出たんだ！ 牧師さん、町長と話をさせてくれ！」

「そう怒鳴らないで、まず落ち着いてください。あなたは……村の獵師の方ですね？」

訊ねたボリスに、男は浅く何度も頷きながら教会に入ってきた。青ざめてガタガタ震えているにもかかわらず、その顔は真夏の労働者のように汗だくだ。

ヴォルカグラスを取り囲む六つの村の住民は、町長に用がある時まず牧師のボリスを訪ねる。そしてボリスが自分の手に余る事件だと判断すると、初めて町長が出てくるのだ。

それにしても人狼など、今までこの近辺に現れたことは一度もない。人狼による恐ろしい事件はリーリアも本や新聞で読んだ事があったが、その脅威が自分達に降りかかる可能性など考えても見なかった。

「今日、日の出前に何人かで狼狩りに行ったんだ。家畜を襲うはぐれ狼が出たんで、そいつを追っ払うために、でかくて、特徴のある奴だったからすぐ見つけられると思って……」

「それが、人狼だったというのですか？」

「いや、違う。家畜を襲ったのはただの狼だ。けどそいつを追って森の奥まで入ったら、とんでもなくてっかい……俺達よりでっかい狼が二本の足で立って、はぐれ狼を殺してた！ あれはただの狼なんかじゃない。間違いなく人狼だ！」

「それで、その人狼は……」

「びびった獵師の一人が一発打ち込んで……けど逃げられて……」

「馬鹿な！ 何もされていないのに、こちらから危害を加えたと言うのですか！」

半ば叫ぶように怒鳴りつけたボリスの声に、獵師が言い訳めいた言葉を連ねる。

ボリスは眉間に深く皺を刻んで渋面を作り、自分を落ち着かせるように祈りの言葉を呟いた。

「リーリア、子供達を家に送ってあげなさい。私は少し、この方と話があります」

リーリアはさっと立ち上がり、不安げに囁き合っている子供達を呼び集めた。

男は明らかに混乱しているし、人狼は狼を獲物として狩ったりはしないはずだ。獵師の勘違いと言う可能性もあるし、ボリスはとにかく詳しく話を聞くつもりなのだろう。

子供達を全員家まで送り届け、リーリアが帰宅すると、町長である父に來客があるようだった。それとなく使用人に聞いてみると、六つの村の村長達が全員集まっているのだと言う。

ただごとではなかった。やはり、本当に人狼が出たのだ。リーリアは緊張で身が竦むような感覚を覚えた。

「人狼狩り……」

そんな言葉がふと頭に浮かぶ。リーリアはくると身を返すと、過去に読んだ記憶のある人狼の本を探して、地下の書物庫へと向かった。

[次へ](#)